

評価が次時への自信につながっていく。その意味で、「まとめの学習」をそこから自信を得たり、新たな課題を見い出したりしていくような場としたい。

(2) 新たな問いの発生を促すまとめ方

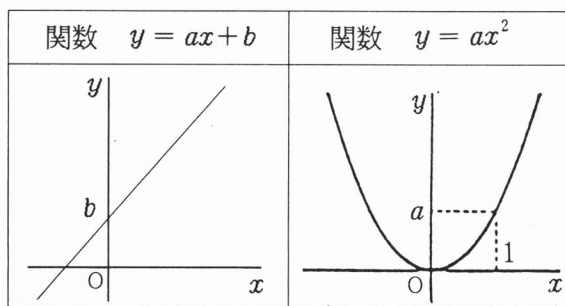
① 「兆より大きな数は？」

4年生の「大きな数」の学習のまとめの時間に、H男から「億、兆と数が大きくなってきたけど、これより大きな数はあるのかな？」という問いが出された。

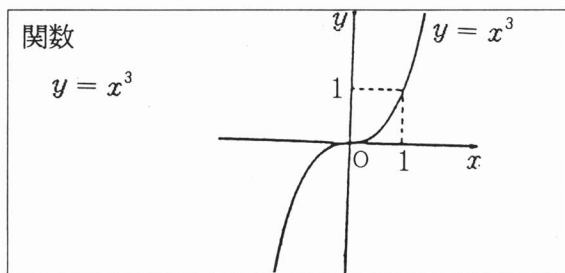
授業後、児童たちは「億・兆・京……不思議・無量大数」と調べた。このように素朴な問いを大切に調べていくことが、新たな問いの発生を促す基本である。

② 「関数  $y = ax^3$  のグラフは？」

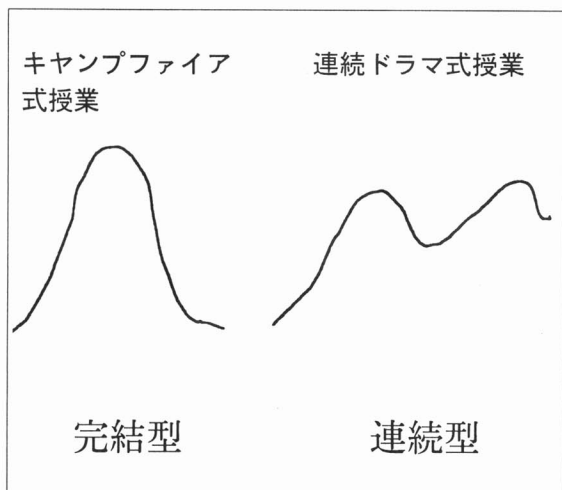
中学校3年で、関数  $y = ax^2$  の性質やグラフについての学習の中で、1次関数との比較をした。2種類のグラフについて、グラフ・対応や変化の様子をとらえた後、「 $y = ax^3$  という関数はあるの？」という、質問が出た。



ある生徒は、授業後に対応表を作り、自分一人で  $y = x^3$  のグラフを完成させた。



このように自ら問い、解決する力を育てていくには、常に、子ども達からの「問い」を引き出すような授業展開を工夫していかなければならない。下図のような、いわゆるキャンプファイア式授業（盛り上がるが、1時間で収束する）から「まとめの学習」を生かした連続ドラマ式授業（次の展開が待ち遠しい）への転換が必要であろう。



問い続ける子ども達を育てていくには、授業の「まとめの段階」での適切な発問はもちろん、子ども達の課題意識を引き出す問題の開発など、さまざまな工夫が必要である。また、導入でオープンな問題を提示するなど、学習全体を通して、問い続けていく子どもを育てていくことが重要である。

3 おわりに

前述のワイルズ氏は、「証明を考えるのは、部屋がいくつもある真っ暗な大邸宅で、明かりのスイッチを手探りするのに似ている。電灯がつけば、部屋全体が見渡せるが、それまではよろよろと歩き回るしかない。」と語っている。

「問い続ける力」を子ども達から引き出していくことは、21世紀に生きる子ども達を育てていく教育の根幹をなすものである。